



《投稿》

原研のこれからに望む

(財)環境科学技術研究所 会長

日本原子力研究所 技術相談役

■更田 豊治郎■

先端基礎研究センターが発足した1993年4月1日は、私が原研を退職した丁度翌々日に当たるので、いささかの個人的感傷を禁じえないものがあるが、同センターの第1期5年間の目覚ましい成果を心から喜び称讃し、さらなる発展を期待するものであります。

それにつけても、前号の伏見康治先生の巻頭言に關連してコメントさせて頂きたい。言うまでもなく、歴史的重みのある示唆深い先生の巻頭言に私などが付言するなど恐れ多いことであるが、原子力研究開発全体が世界的に不条理な逆風の中にあり、かつ動燃の不祥事などによって日本の原子力計画への国民の不信感を助長するようなマスコミの風潮などがあるので、原研についても誤解などがないことを願う原研OBとして、言い訳じみたことも含めて所感を述べさせて頂く次第である。

自分自身の研究業績についての不満と反省は大きいですが、それはさて置いて、原研の初期から今日に至るまでの原研と国内の諸々の環境を考えると、先生の言われる蹉跎が原研の果たしてきた役割や成果にかなりの影響を与えるほどのものだったとは思えない。言い換えれば、原研初期の核物理学者たちが格段と優れていたとすれば、原研の成果も格段に高まっていたはず、というような単純な筋道の事柄とは思えない。

原研創立以来今日までに投入された人員と予算は、国内の他分野と比較すれば大きなものではあったが、欧米先進国のそれぞれの時点までの投入に比べれば、近年に部分的例外はあるものの、総じて大きかったとは言えない。その研究資源の活用に、その時々々の社会政治情勢の影響を受けながらも、原研の限りある自己裁量権の範囲内で、日本唯一の総合的原子力研究所として如何にあるべきかを常に追求し、今日、総合的に欧米に遅れを取っていない研究所にまで発展してきている。原研は原子力の開発に関する研究等を総合的に行うという具体的な目的を持った、いわゆる目的研究所であるが、その目的達成のために基礎的研究が大切

であり、それをどのように行うかといった議論は常にあり、その時なりの努力は行われた。原子力研究開発のための総合的な評価済み核データライブラリーとして、今日世界第一級と自他共に認められているJENDLを原研が中心になって完成し、その改良の活動が継続されているのは、上述のような背景のもとで実際の共同作業を含むシグマ委員会として大学・企業等関連機関の多数の研究者有志の協力が原研初期から得られているからである。これは世界的にも比類のない自主的研究活動の一例である。

程度の差は色々あったにしても、原研の自主性の限界を感じさせられたことは折りに触れ誰もが経験したことと思われるが、それについて「原研はやはり政治家の作ったもの」と自嘲的意識を持った原研の研究者がそれほど多かったとは思えない。それを意識の低さだと言われればそれまでだが、原研の基礎から応用・開発までの幅広い分野の研究者達の研究者らしくありたいという意識のレベルが、世の風潮や研究環境などに影響されずに高く維持されることを願っている。

行政改革の影響が原研にどのように及ぶか予測しがたいところがあるが、世界のエネルギー事情と地球環境のために原子力研究開発を格段に推進すべきであり、例えば軽水炉は成熟度の高いものではあるが新しい炉型の開発も含めて原子力分野の研究開発余地は極めて大きいことを踏まえて、原研は原子力研究開発の中心となる総合研究所としてバランスのとれた研究所であり続けてほしいと思う。そこでは、実用目的の研究開発が量的に主となっても、学問のカテゴリーにこだわらず、学問のための学問から開発・実証まで(勿論何もかも同密度でとは行かない)の幅広い研究があって、異分野間の交流もあり、ゆとりもある、そして、外部の評価を受けるメカニズムを持つと共に確固とした自己裁量権を持った経営が行われるような研究所であってほしいと念願している。